えられる(図2)。2月に%CPが低くなったのは、動物質や双子葉植物の採食量が少なかったためであろう。

本調査個体群のKFIは9月から10月にかけての急増後、11月から2月にかけて減少し、その季節的変化の傾向は%CFの傾向とよく似ていた。%CFは堅果類占有率の季節的変化の傾向とも類似していたので、堅果類の利用可能量がイノシシの栄養状態に影響を及ぼしたものと考えられる。堅果類の利用可能量が本種の脂肪蓄積に影響することはアメリカ合衆国カルフォルニア州のSanta Catalina Island個体群(SCIP)やオランダのDe Veluwe個体群でも報告されている(Baber & Coblenz, 1987; Groot Bruinderink et al, 1994)。しかし、11月以降のKFIの減少は、%CFのそれに比べて緩やかであった。炭水化物は容易に脂質に転化する(シュミット・ギルバート, 1992)ことから、澱粉を多く含む根・塊茎(Robbins, 1983)を冬期に採食することで、KFIの減少が抑えられたものと考えられる。

SCIPは、本調査以外では唯一KFIによる本種の栄養状態の測定が行われている地域であるが、ここは地中海性気候で、一年を通じ広葉草本、果実、種子が主要食物となっている(Baber & Coblenz, 1987)。そして、KFIは草本の成長期である雨期に最高値(30%程度)を示し、乾期に最低値(10%未満)を示す(Baber & Coblenz, 1987)。一方、本調査個体群のKFIの最低値は25.3%であり、最高値は48.2%に達した。今回用いた方法ではKFIが低めに評価されていることを考えると、調査個体群はSCIPに比べ

良好な栄養状態であったと考えられる。この原因としては、当地域では広葉草本、果実、種子以外にも、堅果類や根・塊茎、動物質などSCIPに比べて多様な食物を利用できること、SCIPでもコナラ属 (*Quercus* spp.) が生育していたものの調査が行われた年は不作であったこと、胃内容物の%CPが10.0%と低く脂肪の吸収効率が下がっていたこと (Baber & Coblenz, 1987) があげられる。堅果類の豊凶は年により異なることが報告されている (Matsuda, 1982; 橋詰, 1987; 山下, 1994)。本調査個体群においても、堅果類が不作の場合には栄養状態が今回の結果よりも悪くなると考えられるが、他の食物項目がどの程度その悪化をくい止めることができるのかについては不明である。

イノシシによる農作物被害量は堅果の落下量が多い場合に低く抑えられることが報告されている (Mackin, 1970; Wlazelko & Poznan, 1992)。日本では本種による被害は主に水稲で発生しており (日本野生生物研究センター, 1991)、調査地域では8月上旬から9月中旬がその発生時期である (NOSAI島根, 私信)。堅果の落下は10月から始まるため被害量に直接的な影響を及ぼさないと考えられる。本調査で明らかになったように9月はイノシシの食物の質や栄養状態が悪いため、この時期に収穫を迎える農作物に本種が引きつけられて甚大な被害が発生している可能性がある。9月同様に水稲への大きな被害が発生している8月やタケノコの被害が多くなる春 (島根県農林水産部森林整備課, 1997) についても調査を行い、本種の食性、栄

養状態と農作物被害発生量の関係を明らかにすることは、本種の管理を考
える上で重要であると考えられる。